
入学式開始一時間前

ランデブー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

入学式開始一時間前

【NZコード】

N9382B

【作者名】

ランデブー

【あらすじ】

入学式開始一時間前、僕と彼女は出会ってしまった。

桜が綺麗な並木道を通り抜けて、僕はドキドキとワクワクの一重奏に押し潰されそうになっていた。今日から僕は高校生で中学生の時とは違い自分の行動に責任を持たなくてはいけない、そう思うと気が気でなく腹部が痛くなる。しかしその反面、新しい友達はできるかなとか可愛い女の子は何人ぐらいいるだろうと期待に胸をふくらませていろいろする。

(駄目だ。緊張して足が動かない……)

風が吹いて髪の毛が乱れながら正門までやつてきた途端、僕はテレビのリモコンで停止ボタンを押したかのように静止、それに続いで両足が小刻みに震えた。張り切つて一時間も早くに家を出たのがあだとなつたのか、緊張は頂点に達し眼前が霞んできたような感じがした。しかし、運良く周囲にはおらず自分の腑甲斐ない姿を見られる事はない。もしこんな姿を誰かに見られたら、顔から火が出るかもしれない。

(まだ時間はある。一先ず今は、落ち着こう)

そう思いさつき僕が通ってきた並木道へと振り向くと、桜が舞い上がっていた。僕は口をぽかんと間抜けに開けて、呆然たる面持ちでその光景を見つめる。

「うわあ……すげー。こんなの初めて見たよ

思わず口から出てしまつたが、誰もいないのでまあいいやと思つたが、

「綺麗だよね。私も初めてだよ、君と一緒にね」

横からの声、女の子の。

「えつーー?」

僕は驚き大きな声を出して横へと視線を向わす。するとやっこには、桜色のほっぺをした少女が前を向いていた。名札には1年2組と真新しく書かれていて、僕は直ぐにクラスメイトだと分かった。

「君はさつき両足が小刻みに震えていたけど、ひょっとして私に一目惚れしたのかな?」

桜色のまっぺでニコニコと笑いながら質問。初対面なのに何なんだ、この女の子は。

「アレは……緊張して震えていたんですね。因みに今は少し楽になりました」

僕もニコシと笑った。楽になつたのは君が話しあげてくれたからだよ、と言えればカツコイイのだろうか。

「そうですか。実は私もずっと緊張しているのですが、貴方ならちやんと言えちゃうかもしれません! 勇気を出してきいやいりますー!」

「」としながら学校指定の鞄から何かを取り出すると、同級生の少女は人がかわったかのように田付きが鋭くなつた。この瞬間、風が止み桜はハラハラと地面へ。

「君は、人を好きになった事がありますか？loveでもlikeでもどっちでも構いませんが、人を、家族や友達や仲間や先輩や後輩を好きになった事ありますか？私は残念ながらそんなのが無いんです。好きだと思った事なら何度もありますが、その胸を相手に伝えてないし相手が受け入れないとこーいうのは駄目駄目だと思うんですよ。片一方が好きで片一方が嫌いだつたら、天秤は傾くし釣り合いませんしね」

言い終わると、再びニコッとした顔に戻る。何故学校指定の鞄から取り出したまりもつこりを握りながら突然そんな事を言ったのかは謎。しかし目の前にいるクラスメイトの女の子は僕の答えを待っている。何か言わないと！

「ん~。僕にはよくワカラナイけど天秤は別に釣り合わなくとも良いと思うよ。だって、釣り合わない＝嫌いって決まったわけじゃないし。何でもかんでも釣り合うなんて不可能だし、傾いてるのが普通だと思つんだけど違うかな？」

初対面の女の子に何言つてるんだろうと思つたが、気付いたら口が動いていたから諦めた。

「そりなんですか～。外見で決めるんじゃなくて内面を見る、全然知らないけど自分で知ろうと努力する、例え相手が嫌いでも好きになると言いたいんですね」

まりもつこりを僕に手渡しながら言つ。

「そりなの……かな？」

「じゃあ私と付き合って下をこお願いしますー。」

「え？」

「会つたばかりの同級生でも好きになれるかを試したいんです。例え恐い顔でも不細工な顔でも、話してみないとその人の事なんて何もワカラナイじゃないですか。見た目で判断するのは差別みたいな感じだし、私はそんなの

」

コレは告白なんだろ？ 「キデキとかキュンキュンしてるから、告白なんだろ？

「君は超緊張してると思つけど、私も実は超緊張しててるのだよ。だから、もつ一つまつもちやんを鞄から出れなくすがや」

何故緊張したらまつもつひとつを出さなくちゃいけないのかはワカラナイが、僕はどうすれば良いの？

「つて事で私は今日からバカップル！ 色々バカな事やつちやおつ、例えば人前でディープキスとかモノマネとか耳たぶの触り合いとか×××××とか」

頼むから普通のカップルにしてくれ！ ……×××××つて何なんだ、気・に・な・るー！

「わ、時間がくるまでディープキスだ」

桜色のほつぺの少女とカップルになつた僕は休み時間彼女に体育馆裏に呼び出されて、

「まりもつこりより好きになれるよう努力するよ」

と言われ落ち込むのだった。……えつ、終わり？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9382b/>

入学式開始一時間前

2010年10月11日12時51分発行